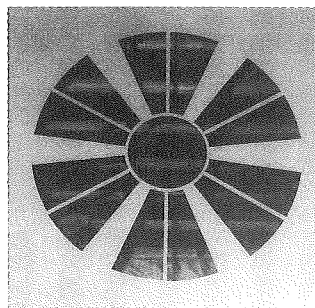




龍造寺家紋“十二日足”

龍造寺氏はもともと肥前に勢力を保っていた在庁官人の高木氏の流れといわれている。在庁官人とは平安末期に肥前国衛の事務を司っていた地方在住の有力者である。肥前国佐嘉郡小津東郷龍造寺村を中心に国人領主として勢力を保ってきた。この龍造寺村は現佐賀市の中心である佐賀城域にあったもので龍造寺氏は村中龍造寺氏と水ヶ江龍造寺氏の二家に分れ、村中龍造寺氏は現佐賀西高等学校域を中心に館を構え（村中城）水ヶ江龍造寺氏は現佐賀市立赤松小学校の東域に館を構え（水ヶ江城）とくに与賀・川副地方を中心に勢力を伸ばしていた。国人領主としての龍造寺氏は肥前に進出した少貳氏を扶けていたが、中国の大内氏の九州進出の動きの中で実力を蓄えてきた龍造寺氏は少貳氏との対立を強めていった。佐賀を中心に勢力を伸ばし続けた龍造寺氏に少貳氏はもちろん、肥前の国人領主達も警戒感を深め、少貳氏を擁して龍造寺氏排斥の動きが強まった。天文十四年（一五四五）水ヶ江龍造寺氏を率いて勢力を伸ばしていた龍造寺家兼が有馬氏などと結んだ

一 久保田領の成立

(一) 龍造寺隆信と久保田

高房・八助（安良）の弟、龍造寺主膳が八助時代に幕府から支給されていた千俵の米の再支給を働きかけた事件にも村田家は関係したが実現できず、伯庵、主膳とともに他家へ預りとなった。高房が亡くなった慶長十二年の翌年には佐賀で龍造寺姓を名乗るものはいなくなり、八助も村田を称することになった。その後、鍋島血筋の白石鍋島家、また藩主光茂の子を養子とするなど龍造寺色はうすくなり村田家も軍役を負担したり、献米を行ったりして龍造寺宗家としての処遇も失なわれ、藩政の中で御親類として一翼を担うことになった。軍事的には本藩直属の大組から離れて備えとして独自の組織とされている。この武士達は久保田領内に住む者以外に領外に住む者も多かった。久保田に屋形を持ち、佐賀城下では北の門に近く広大な屋敷を持っていた。

久保田領は嘉瀬川に接して南への干拓が進み、村域が南へ進展するなど村域そのものが拡大して行き、治水や農業技術の進歩によって土地生産力は伸びていった。いっぽう、長崎街道にも面して久保田、徳萬の宿は旅人の往来もあって郷宿として奥行き長い商家の並ぶ街村を形成するようになった。窓の梅は佐賀を代表する銘酒であるが当時嘉瀬川の清い水を利用して生産されており、漁業も栄えんとなってきている。

また、久保田領主が佐賀藩校弘道館の頭人を勤めたように文化的にも進んだところでとくに教育が充実し、江戸梅亭、本野盛亨（周蔵など）すぐれた人物を輩出した。幕末期には村田若狭（政矩）は深堀鍋島家から養子として迎えられたが鍋島直正を補佐して長崎警備に努力し、西洋の近代技術の導入に努めており、本野周蔵を通じて武器の購入に努力もしている。また、江口梅亭のようなすぐれた医師が多かった。また、アメリカ人宣教師フルベットの若狭との交流は深く、内輪のことであったが洗礼をうけている。久保田は長崎街道に面し、長崎、江戸からの時代の風をつねに受容していたのである。

肥前の反対勢力のために城を追われた筑後に一時亡命せざるを得なかったのはこの理由であり、この際に家兼の子や孫などの一族が多く殺され龍造寺氏は大打撃を蒙っている。この時にのちに戦国の雄となった龍造寺隆信の父周家も神埼郡尾崎村の祇園原で謀殺されている。

しかし、家兼が間もなく筑後から帰って佐賀にはいった。これは、龍造寺氏が佐賀南部の川副・与賀で培っていた地盤があったからでこれらの地域の人々に後押しされたわけである。川副・与賀の両郷はまさに龍造寺氏の基盤であり、この関係はその後も続いている。

龍造寺隆信にとって曾祖父にあたる家兼は子や孫の多くを反対勢力によって殺されるという大打撃をうけながら佐賀に復帰した。剛忠こうちゅうさんの名で親しまれている彼は龍造寺氏発展の基礎を築いた。彼は水ヶ江城に復帰後、翌天文十五年（一五四六）九三歳で没した。

なお、家兼が筑後から帰国する際にこれを助けた人物の中に芦刈の鴨打陸奥守胤忠とともに窪田民部少輔胤秀や西持院などの名があり久保田方面も龍造寺氏の影響下にあったことがうかがえる。

家兼は佐賀復帰を果たしたが、子供の家純・家門の両名、孫の周家・純家・頼純を失ない水ヶ江系龍造寺氏は大打撃をうけていた。周家の子の龍造寺隆信は享祿二年（一五二九）二月、水ヶ江城東館天神屋敷で生まれた。現在佐賀市立赤松小学校の東に誕生地の記念碑がある。母は村中龍造寺氏の胤和の娘慶間である。なお慶間の妹は窪田胤俊の妻となっており窪田氏が龍造寺氏と太い連がりを持っていたことがうかがえる。ちなみにあと二人の妹達も江上元種、倉町家俊の妻となっているなど有力者とながっている。

隆信の幼名を長師丸といい、家兼の意向で天文四年（一五三五）七歳にして出家し、水ヶ江城の西にある宝琳

院にはいった。家兼は仏教に帰依し、一族の菩提をとむらうために弟を水上万寿寺（佐賀郡大和町）にいれた。天享和尚である。なお、三男が宝琳院の豪覚和尚である。隆信は大叔父の豪覚のもとで円月と号して修行したが知力・体力ともにすぐれていたと伝えられる。子や孫を失った家兼は「水ヶ江龍造寺氏の惣領職は家門の子鑑兼に、家純の遺領と家兼の隠居分は周家が次男長信（隆信の弟慶法師丸）に、隆信は人間が大きくて大志を持っている。今後龍造寺家を興す人物なので時機をみて還俗させるように」と遺言したと伝えられる。

隆信は天文十五年（一五四六）三月、家兼の死後一八歳で還俗して龍造寺胤信と称し、水ヶ江龍造寺家をついだ。彼の相続については一族や老臣の中にも異論をとるものもあったといわれる。

いっぽう、本家筋ともいわれる村中龍造寺氏は天文八年、龍造寺胤栄がついだが、当時は水ヶ江龍造寺系の家兼の勢力が強く、胤栄も家兼に属して戦っていた。天文十四年、家兼は東からは大友氏を結んだ少弐氏、そして西からは有馬氏の進出、それと結んだ馬場頼周らの反龍造寺勢力によって大打撃をうけると胤栄は中国の大内義隆と結んで東肥前に兵を動かし、天文十六年には義隆より肥前国代官に任ぜられている。胤栄はさらに大内氏の援助のもとに少弐冬尚を支持する勢力を破り、義隆から戦功として佐嘉郡のうち五〇〇町、神埼郡西郷五〇町、三根郡下村二〇〇町・防所三〇〇町を得たといわれる。胤栄は胤信（隆信）とも協力して神埼の勢福寺城にいた少弐冬尚を攻め、米田原（目達原）の合戦で勝利を得て冬尚を筑後に追落している。その後、天文十七年三月、胤栄が二五歳で病死、ここで一族、老臣達が協議して隆信と胤栄の妻を結婚させて村中龍造寺家と水ヶ江龍造寺家の惣領職はともに胤信（隆信）が相続することとなった。龍造寺家は一つにまとまって戦国の争乱の中に生き残ろうとした。また、この龍造寺家は九州進出をはかった大内義隆を支持したのであり、天正十九年には義

隆のはからいで山城守に任せられ、また、義隆の隆の名乗りを許されて龍造寺山城守隆信と称することとなった。

しかし、その翌二十年の九月、大内義隆が家臣の陶晴賢に攻められて自刃すると隆信は大きな後継を失って危機を迎えた。豊後の大友氏が少貳冬尚を擁して肥前進出をはかり、また隆信の龍造寺氏支配に反発していた土橋栄益はこの機に大友義鑑に接近、水ヶ江龍造寺の流れをくむ龍造寺鑑兼を押し立てて隆信排斥をはかり東肥前の有力国人である神代勝利・高木鑑房・小田政光・八戸宗暘・江上武種・横岳資誠・馬場鑑周・筑紫惟門・姉川惟安・本告頼景などそれに西からは有馬・後藤・多久氏など先年の龍造寺家兼への包囲網と同じような反龍造寺隆信態勢が出来上り、隆信は弟の長信らとともに筑後柳川の蒲池鑑盛を頼って佐賀から落ちていった。隆信が落ちて行ったあとは龍造寺鑑兼を中心に小田・高木・神代・八戸氏などが佐賀での連合政権的な動きを示していたが、隆信の復帰を望む声が佐賀郡の与賀・川副の両郷を中心に強かった。天文二十一年（一五五二）は凶作で佐賀郡内では百姓救済策が充分ではなく、この農民の不満を背景に芦刈の鴨打陸奥守胤忠の支援で戻ろうとしたが風にはばまれて果せなかった。この際窪田民部大輔胤豊が鴨打の味方にさそわれている。翌天文二十二年七月、隆信は鍋島・小河・納富・福地などの家臣と相談し、与賀・川副の鹿江・南里・石井・内田・久布白・横尾・立河・堀江・副島・飯盛・石丸・村岡・御厨・徳久・古賀・久米氏などの郷士の支援をうけて川副郷の鹿江に上陸し威徳寺で旗あげした。与賀・川副両郷の百姓達も凶作への対応に不満を持っていたのと、隆信が「目的を果したら、各自への恩賞はもちろん永代にわたり減税する」と約束したので鎧と槍一本で協力した。これらの支援をうけて近くの高木・八戸・神代の軍を破り小田政光を追放して佐賀城を奪還し、九月下旬には神崎勢福寺城の江上武種を下し、十月には小曲城（蓮池）の小田政光とも和睦して佐賀を平定し、隆信は村中城、弟の長信は水ヶ江城に

はいった。長信はのちの多久家の祖である。土橋栄益は殺され、龍造寺鑑兼は筑後に追放されたが、隆信の母（慶間）のとりなしもあってのち許された。

反隆信の中心であった少貳冬尚は神崎の勢福寺城にもどり、東肥前の国人層を中心に隆信との対決姿勢を再び鮮明にした。永禄元年（一五五八）十二月三日付の河上神社への願文は龍造寺隆信・神代勝利・江上武種の連署で肥前の安泰と三家の協力融和がその内容である。この三者のバランスの上での一時的な安定がはかれたものである。しかし、その翌永禄二年に隆信は勢福寺城を急襲して少貳冬尚を助けていた江上武種を降伏させた。江上・神代の支援を失った少貳冬尚は勢福寺城で自刃した。馬場・横岳らの少貳一族も隆信にくだった。しかし、神代氏は佐賀・神崎の山内の地の利を生かしてその後も頑強に抵抗を続けた。

大内氏滅亡後、敵島の戦いで陶晴賢を倒した毛利元就は九州における大内氏の旧領を引き継ごうとし、豊後から進出をはかった大友氏と対立した。隆信は大友氏との対立を避けながら肥前の支配を進めていたが、大友義鎮は永禄七年（一五六四）毛利氏との間の一時的な和平の間に少貳冬尚の弟・政興を擁して少貳家を再興するとの名目で肥前の諸勢力に呼びかけ龍造寺隆信の孤立化をはかった。いっぽう永禄九年、筑前の諸勢力が大友義鎮に叛旗をひるがえすと毛利氏はこれを支援し、大友・毛利の和平は破れ、隆信は毛利氏と通じて大友氏の肥前進出に歯止めをかけようとしたが大友義鎮側が兵力的に優勢であった。中国地方で尼子氏が出雲進出の動きがあり、毛利氏が筑前から兵をひいたのを機に元亀元年（一五七〇）三月、大友義鎮（宗麟）は筑後の高良山に陣を構えて肥前の諸勢力を先頭に佐賀進出をはかった。兵力的に劣勢な龍造寺軍は各地で苦戦を強いられた。しかし、八月十九日、鍋島直茂の意見に基づいた今山の急襲（佐賀郡大和町）によって大友八郎親貞を討ちとることで起死

回生の逆転に成功した。

この鍋島直茂の作戦に協力した勢力の中に牛尾の別当琳信らとともに西持院有秀の名がある。

「隆信の猛威ここに始まり 信昌（鍋島直茂）の武風これより興る」と『歴代鎮西志』に書かれた様に大友氏の動きに留意しながら、東肥前を手始めに、北西部の波多・鶴田・草野氏をうち、西の塚崎（武雄）の後藤、須古（白石）の平井を攻めて天正六年（一五七八）の段階ではほぼ肥前の全領域に勢力をのぼし、さらには筑後・肥後・筑前・豊前、そして対馬・壱岐にまで威令を及ぼし、いわゆる「五州二島の太守」と呼ばれるほどになり、九州を薩摩の島津・豊後の大友とともに三分するほどに成長した。今山の合戦によりほぼ一〇年後のことである。この間、久保田に関するものとしては武雄の後藤貴明と龍造寺隆信の争いの中で天正二年、後藤貴明は和睦のため子供の後藤弥次郎晴明を人質として隆信に送り、晴明は佐賀郡太保の庄におり、久保田に館を構えていた。これは天正五年に武雄に帰されるまで続いており、いわゆる後藤館である。また弥次郎晴明は隆信の養子として太保庄を領有していたと考えられる。その後、隆信の三男家信が後藤貴明の養子として後藤家を継ぐことになるのである。また、隆信が五ヶ国配分帳に「五州二島の太守」と称された頃の天正八年の配下の国侍の中に久保田胤豊と称する人物が記載されており、久保田の土着の武士と考えられる。

天正十二年（一五八四）隆信は西肥前からの後顧の憂いを絶つために兵を催し、島原の有馬氏を討とうとした。



龍造寺隆信画像（高伝寺蔵）

隆信は隠居の身で須古の高城に住んで佐賀には子供の政家に任せていたが大軍を率いて島原を攻め、数の上では有利にみえたが、有馬を支援した島津の軍のために策にはまって隆信が戦死し、数は多くても各地からのいわば「借り武者」すぐに瓦解して敗走し、政家は佐賀に、鍋島直茂は柳川に帰った。多くの側近が戦死する中で龍造寺氏への責任追及の声もあり、政家はこの中で政治手腕を持つ鍋島直茂に政治運営を任せることで批判をかわそうとした。しかし、この事で隆信の従弟であり、しかも隆信の母（慶間）が直茂の父と再婚したこともあって兄弟となった直茂の政治手腕に人望が集まりその後、豊臣秀吉の九州進出の対応に積極的だった直茂に龍造寺一門や重臣達の信望が集まり、御国裁判すなわち藩政運営の実権が直茂に移り、ひいてはその子勝茂へ連続する方向と

肥前國佐賀縣之隆信

龍造寺隆信は佐賀縣之隆信

龍造寺隆信は佐賀縣之隆信

龍造寺隆信は佐賀縣之隆信

龍造寺隆信は佐賀縣之隆信

龍造寺隆信は佐賀縣之隆信

龍造寺隆信は佐賀縣之隆信

龍造寺隆信は佐賀縣之隆信

龍造寺隆信・鎮賢（政家）連署判物
（『西持院文書』）

なった。直茂は豊臣秀吉の信望を得て長崎代官に任ぜられた。この動きをみて隆信の母で直茂の父とも結婚した慶間は龍造寺氏の存続に危機感を持ち、政家のあとを鍋島直茂につがせて龍造寺名跡を保ち、その直茂のあとを政家の子高房に継がせ、勝茂は隆信の次男で江上家をついた江上家種の跡をつがせるといふことで龍造寺・鍋島の合体をはかり龍造寺氏を保とうとし、天正十六年には政家は直茂を龍造寺飛騨守と名乗らせるなどしたが、結局は直茂は龍造寺氏を継がなかった。この動きの中で秀吉は佐賀の藩政に干渉し政家に隠居を命じ、龍造寺の家督は高房に認めたが、高房を証人として秀吉の側に住まわせた。

(二) 久保田の龍造寺政家

天正十八年（二五九〇）二月二十九日、豊臣秀吉は政家に対して隠居を命じ、隠居分として佐賀郡大俣郷で五二四石を与え軍役は免除された。

肥前佐賀郡内、大俣五千貳百貳廿四石事、

為隠居分、令扶助条 全可領知、但軍役

令免許者也

天正十八年二月廿九日

秀吉朱印

龍造寺民部太輔とのへ

これは秀吉が政家に与えた朱印状であり、実質的には隠居の命令でもある。家督は子供の高房に安堵されたが、高房は証人として上方に住み、佐賀の国政運営は鍋島直茂に任される形となった。その後、秀吉の朝鮮出兵については鍋島直茂に軍役が課され、直茂は龍造寺系の後藤家信（武雄）龍造寺家晴（諫早）龍造寺家久（多久）龍造寺信昭（須古）らの龍造寺一門や鍋島家一門や譜代の家臣、それに神代・千葉・成富・小川・姉川・鴨打・倉町・犬塚・田尻など龍造寺氏の重臣達を率いて出兵している。これによって家督を相続した高房の指導権は名

実ともに失なわれた。鍋島直茂そして勝茂も出兵し、この鍋島氏の軍役体制に龍造寺軍団が従属したわけである。

政家も軍役を負担することは大名として豊臣政権の一翼を担うことという理由から出兵を申出たが、もともと軍役免除の隠居の身であり果せなかった。

ところで政家の隠居地がなぜ佐賀郡大俣郷、すなわち久保田を中心とする地方であったのかということについては秀吉の意向を示す様なものは記録などでは残っていないが、もともと龍造寺氏の根拠地は佐賀郡龍造寺村で与賀川副郷を基盤としているが、これはずして嘉瀬川の西に配置しているのは当を得たものとも考えられる。秀吉にすれば、自分が信頼する鍋島政権を守る上からも龍造寺氏の根拠地を離れさせ、だからといって佐賀からあまり離れた所では家臣団の動揺が懸念されたのではないかと思われる。五〇〇〇石余であるが軍役を免除されているので経済的にはその分有利であり、嘉瀬川の河口に面して干拓地を造成する可能性は強く、米遣いの経済といわれた中で、肥沃で土地生産性は高かった。小川舎人という佐賀藩士が江戸中期に書き残した「焼残反故」

という記録の中で

政家公久保田御側衆之事として久保田での政家の側近三三人をあげているが

龍造寺越前守 納富久左衛門 田中上総守 鍋島弥六兵衛 馬渡三右衛門 伊香賀藤左衛門 鍋島十助 土橋源左衛門 諸岡因幡守 執行又右衛門 野口意三 馬渡左馬允 中尾孫九郎 橋本喜六郎 飯盛備前守



龍造寺政家画像
(佐賀県教育委員会)



閑室元佶肖像

肥前小城に生まれる。
学問にすぐれ足利学校第9代座主、
寺社の訴訟や外交事務にあたる。
(近世の肖像による)

直茂に佐賀へ一旦帰国する様に命ぜられた。佐賀にいた直茂は「名分なき柳川攻めの意味」を充分に理解していた。勝敗はもう明白である。徳川氏への忠誠の證を示せば足りる戦である。いっぽう立花宗茂もそれを理解しており、決して柳川城での籠城という戦略はとらず、兵の一部を平地の八の院に出して戦を挑み、直茂も鍋島平五郎を正面に立てて戦って決して消耗戦には持ち込まず、一応の勝敗が決した所で加藤・黒田が軍監として佐賀側の勝利とした。ここで鍋島も立花も武威を充分に示して戦ったことで、この戦ぶりで鍋島も安泰となり、立花宗茂も柳川城を離れたが後の帰参の遠因もこの戦いふりにあったともいえる。勝茂は佐賀藩安泰の周旋をしてくれた西本願寺のために城下に願正寺を建立し、元佶のためには出身地の小城に三岳寺を建立して保護した。

横田左馬助 久真 木村正兵衛 福地三左衛門 於保太郎三 中村善七 江副左助 大嶋隼人
である。筆頭の龍造寺越前守は村中龍造寺系の家就であり、天正八年の段階、すなわち隆信在世時から「佐賀宿老」にあげられている人物であり、天正八年の「五箇国配分帳」には龍造寺一門の中に知行地三八五町と記載されている。知行地は記されていないが、久保田地域であった可能性が考えられる。
政治家は隠居の身、その子高房はいわば人質的な証人の身、いっぽう直茂は文禄の役で苦戦しながらも戦功をあげ、和平交渉が決裂した後の慶長の役には直茂の子勝茂も出兵している。文禄五年（一五九六）六月には勝茂あてに龍造寺一門や重臣達が勝茂の下知に従うことの起請文を一五名の連名で提出している。
秀吉の死によって名分なき戦は終り、日本軍は引揚げ、直茂・勝茂は兵を率いて上洛し秀頼に御目見えして伏見で越年している。直茂は佐賀に帰ったが、勝茂はそのまま残って慶長五年（一六〇〇）西軍に参加し伏見城や伊勢の安濃津城などの東軍の城を攻め戦功をあげたが、関が原の敗戦で決着がつくと本多正信や西本願寺の准如さらには小城出身で足利学校の座主として徳川家康の信任の厚かった元佶（学校）を通じて家康に詫言を入れ、同じ西軍でさきに筑後柳川に帰国していた立花宗茂と戦うことで佐賀藩の存続の保証を得ている。この間、龍造寺高房も勝茂とともに西軍として行動しており、佐賀藩は藩存亡の危機感の中で龍造寺家系の諸氏と鍋島家系の諸氏との間にかえって運命共同体的な一体感が強まった。鍋島直茂・勝茂体制はかえって強化されたのである。直茂は高房が一五歳になったら高房に政権を譲る旨の証文を与えていたともいわれるが、実は関が原の戦のあった年こそが高房一五歳であり、たとえこの証文が事実にしても藩存亡の危機を乗切るのに若い高房に任せられる筈もないと周囲が判断したと考えられる。柳川攻めを急ぐ勝茂は帰国のその足ですぐに柳川に攻め入ろうとしたが、